

弥生時代のはじまりは 500 年遡ることはない！

－菜畑・板付遺跡は、臨海遺跡－

全邪馬連会員 10038 丸地三郎

「弥生時代のはじまりは紀元前 300 年頃、終わりは紀元後 300 年頃（この間約 600 年）というのが、これまでの通説です。最近、自然科学的な年代測定法により弥生時代中期の年代が 100 年近く遡り、始まりも 500 年近く早くなるという説も出てきています。」このように、国営吉野ヶ里歴史公園の弥生ミュージアムの資料も記し、500 年遡る説が無視できなくなっていることを示しています。

ご存知のように、『2003 年 5 月に、国立歴史民俗博物館(通称「歴博」、千葉・佐倉市)は、九州北部や韓国の弥生早期から前期の土器を炭素 14 年代測定法の AMS 法によって計測し、その結果、弥生時代の始まりは、定説より約 500 年 古い、紀元前 10 世紀とする新説を発表した。』ことに起因しています。この歴博の説について、疑義を呈し、500 年遡らないことを、示します。

歴博の新説に対して、学会などからは、鉄器の開始時期が中国と日本の間で矛盾が生じるとの指摘や、海洋リザーバー効果の影響の指摘が行われた。その指摘に対して、歴博は、それぞれ、反論を行っている。

2005 年に藤尾慎一郎氏が、「AMS-炭素 14 年代測定法が明らかにした日本の鉄の歴史」を発表した。その主旨は、「弥生早期・前期の鉄器資料の再検討を行なった。その結果、1-2 点を除き、すべて時期を特定できないことが判った。」とし、「曲り田遺跡の鉄器も出土状況も出土状況を示す図面や写真が公開されていない。弥生早期に比定する証拠が弱い。」と記し、「従って、弥生早期・前期には鉄器があった事にならない。」と、発掘時及びその報告の仕方が厳正に行われなかったとして、考古学者の長年の成果である弥生時代早期・前期の鉄器の出土の全てを否定するという暴挙にでた。

2005 年に、総研大文化科学研究に、藤尾 慎一郎氏・今村 峯雄氏・西本 豊弘氏の共著として、「－AMS－炭素 14 年代測定による高精度年代体系の構築－」を発表した。この中で、「歴博の測定値が従来の年代観より 500 年も古くでているのは海洋リザーバー効果の影響とみる批判が、2003 年 12 月の『考古学研究』199 号誌上で西田茂によっておこなわれた〔西田 2003〕。2004 年 7 月には田中 良之も同様の指摘をおこなった〔田中ほか 2004〕。」として、「この問題に対する私たち（歴博）の考え方と、海洋リザーバー効果の影響をどのように認定しているのか説明しておこう。」と反論を開始し、「海洋リザーバー効果の影響の有無は、その試料の $\delta^{13}\text{C}$ 、 $\delta^{15}\text{N}$ の値、炭素/窒素比を調べて、総合的に判断する。」として、海洋リザーバー効果の影響はないとの見解を記している。更に、本文ではないが、注 2) において、『ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。』と海洋リザーバー効果影響の排除を断言している。

因みに、この注 2) は、どの部分に対する注なのかと云うと、三、調査内容 1、年代測定の試料の種類 ①煮焦げ の項の終りの部分の「縄文・弥生時代の場合、付着炭化物の年代は土器の使用年代と同じとみなすことができる 2)。」に対する注である。この注は長文で、「なお、海洋性の魚介類を調理したものが試料である場合が考えられ、データの解釈には注意が必要である。」と云うデータの取り扱いについて記している。魚介類の炭素 14 に関する取り扱いについて詳細に説明した後、「海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性があるので、試料としては避けたほうがよいという意見もある。ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。」として、測定の対象としてこなかったと記し、歴博の試料の取り扱いの正当性を主張している。更に「2003 年 7 月までに研究グループが提示した調査内容のなかにはこの点に関して言及していなかったために西田茂氏の批判をうけることとなった〔西田 2003〕。」とこの論文発表 2005 年以前の論文で、『この点』即ち『ちなみに歴博では海岸に接して

立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。』ことに言及しなかったことが、批判を受ける要因になったとしている。暦博としては、『この点』が暦博の弥生時代の開始年代に関する重要な要件で有ることを繰り返し示していることになる。

では、『この点』に注目して行くことにする。 暦博論文で論拠とされている試料を出土した遺跡が『海岸に接して立地する遺跡』で無いのか、有るのか、検討し、確認してみることにする。

『海岸に接して立地する遺跡』とはどんな条件か、検討してみる。この注2)の中で、その直前に書かれている文章が明確なので、これを、主要な判断基準としたい。「海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性があるので、試料としては避けたほうがよいという意見もある。」 この文章から、「海産食料に多く依存する」古代集落を「海岸に接して立地する遺跡」とする。

では、その土地の条件とは、どんなことになるのか。初期水田稲作を行った人々は、海を渡って来た渡来民であるか、又は、海を渡って水田耕作技術を獲得して戻ってきた人々であるので、そのいずれとしても、船や航海の技術を持ち、海に親しみを持っているはずで、舟・船に乗り、海産食料を入手することが出来る人々と考え。従って、海岸線から1km以内の集落、又は、河口から5km以内の川に面する集落という条件にしてみる。

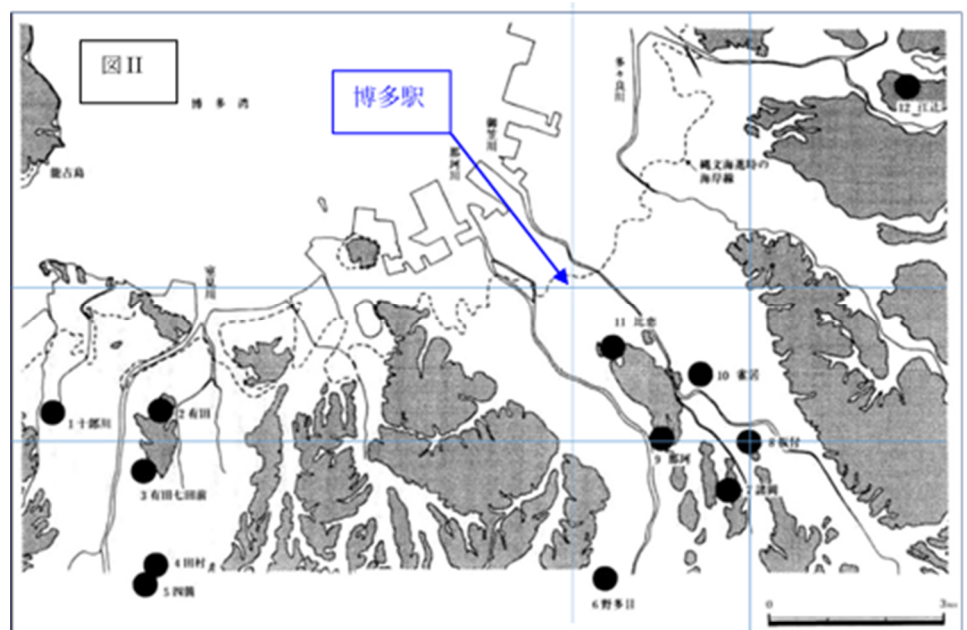
対象として確認する遺跡については、暦博論文中で、弥生最古の土器の較正年代は、「山の寺式の底部(図5-1)内面の煮焦げが前930~800年(91.2%)」 中略 「夜臼I式土器を伴って出土した板付34次調査出土の粗製深鉢の外面付着炭化物は前900~790年(95.4%)」としているので、唐津市菜畑遺跡と福岡市・板付遺跡の二つを代表として取り上げる。 図Iは、(図5-1)に該当する Fig.5.の図。



検討対象とする海岸線・河川は、現代の海岸線や河川では無い。この暦博の遡らせた年代=現在より2800年~3000年前。即ち、紀元前1000年頃の海岸線と河川が対象となる。

まず、福岡市の板付遺跡について、確認する。

図IIは、1999年3月暦博研究報告の論文・藤尾慎一郎著「福岡平野における弥生文化の成立過程」の図に、丸地が博多駅と板付遺跡に補助線などを入れたもの。



これを見ると地形は現在のもので、「点線」で示されたラインは、縄文海進時の海岸線として示されている。一般的には、縄文海進の最進時期は、6~7千年前の時期で、その後、海岸線は退い

ている。この常識に基づき、この現在の地図をしてみると、板付遺跡は、縄文海進の海岸線から4 km程度、離れており、海退した弥生時代の海岸線からは、5 km以上離れ、明らかに『海岸に接して立地する遺跡』では無いように見える。

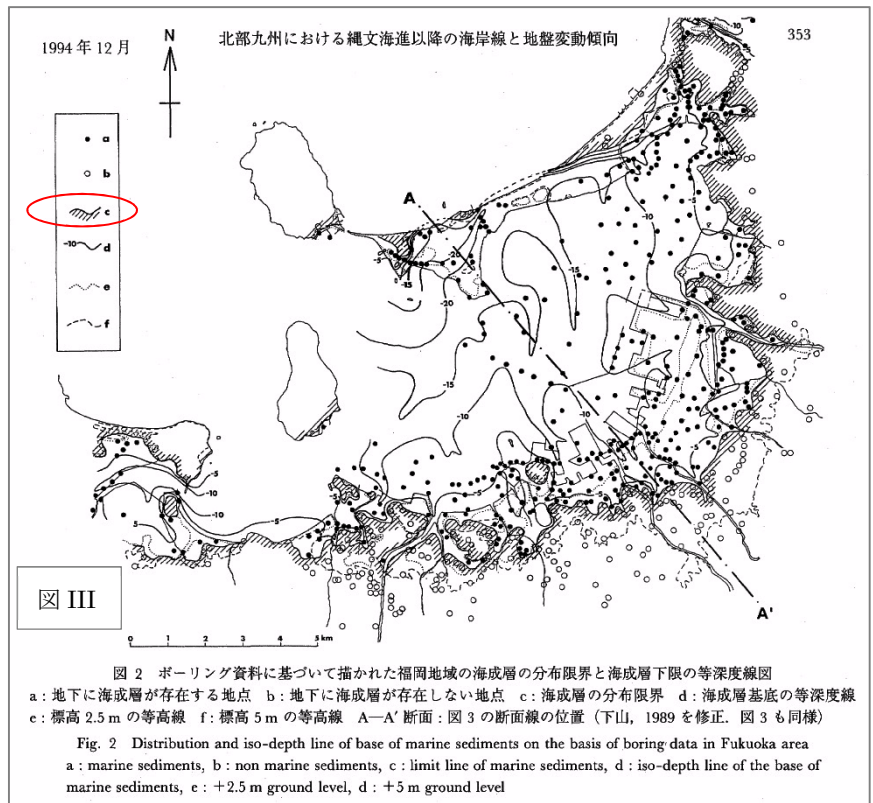
では、3,000年前の海岸線を記した地図を探してみる。

1994年12月に第四紀研究で発表された「北部九州における縄文海進以降の海岸線と地盤変動傾向」当時九州大学理学部の下山正一著に、明瞭な地図情報が記されている。下山氏はこの海岸線は縄文海進の最も海進の進んだ時期のもので、博多湾のその時期は4千900年前だとしている。この海岸線図は、歴博の図IIの海岸線とほぼ重なる。

続いて、この海岸線について述べている論文がある。(財)九州大学出版社1998年発行の「福岡平野の古環境と遺跡立地 —環境としての遺跡との共存のために—」の

第4章に「博多遺跡群をめぐる環境変化 —弥生時代から近代まで、博多はどう変わったか」著者は、磯望・下山正一・大庭康時・池崎譲二・小林茂・佐伯弘次。この論文では、この海岸線の時期を見直し、「14C年代で、3,190年前から2,580年前の間となる。」と記し、「堆積物の厚さなどを考慮すると、その年代は約**3,000年前**で、数百年の誤差をもつものと判断された。」と結論づけている。博多付近では、地殻変動があったようで、縄文時代の海面高さは、他の地域と異なる動きをしており、注意が必要だった。同じ論文に、博多駅東北側の地図(図IV)があり、3,000年前の汀線と共に、5世紀初めの汀線を記載している。(青色のラインは、丸地が、元のラインをなぞったもの。赤い楕円2つと青色の文字(5世紀の汀線の案内)と矢印も追記。)3,000年前の汀線：黒い太い線と5世紀初頭の汀線が近い処にある。

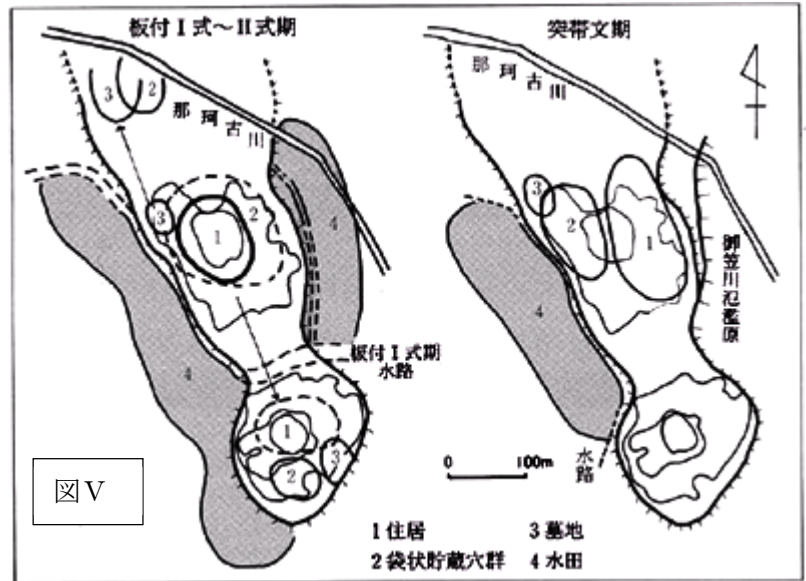
信頼できる14C年代の測定結果と遺跡群の発掘結果から判明した2つの汀線を見ると3,000年前以降1,500年ほどの間は、海岸線の移動が極めて少なかったことを示している。不思議なことに思えるが、地質学の教える処では、九州の北部・日本海側の地盤は、全般に沈降傾向にあること、又、砂の堆積が著しく、砂丘を作り、海岸線が徐々に海側に移る現象があるとしている。沈降スピードと砂の堆積のバランスが、時代ごとの汀線を作っているとのこと。



又、博多付近の平地の周辺には、警固（けご）断層などの断層がいくつもあり、地殻変動の痕跡が見られる地域。一般的には7,000年前から6,000年前に起こったはずの縄文海進のピークが、博多湾では3,000年前にあることは、その時期の前に大きな地殻変動が発生したことが考えられる。

暦博の図が示した縄文海進の海岸線こそが、3,000年前の海岸線・汀線であることが判明した処で、板付遺跡から海岸線までの距離を検討してみる。板付遺跡は御笠川に面して立地している。右の図Vは、「日本列島の弥生時代と日韓交渉 ～北部九州・福岡平野周辺を中心に～」久住猛雄著の中の図で、那珂古川と記してある川は御笠川のこと。川に面していると言える。

板付遺跡と博多駅の距離を計測すると4kmとなる。板付遺跡から御笠川の当時の河口までの距離は4.5km程度になる。板付遺跡は、海産食糧に依存した生活をしてきた地域になる。同様に、那珂遺跡・雀居遺跡なども海産食料に依存していたものと言える。

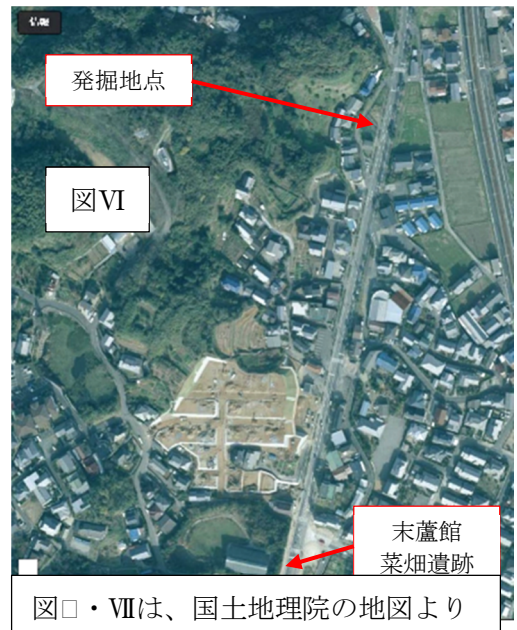


図V

次に、唐津市菜畑遺跡について検討する。



図VII



図VI

図VI・VIIは、国土地理院の地図より

菜畑遺跡の出土物などは、唐津市立の末蘆館に展示されているが、実際の発掘現場は、約350m北側にある。図VI参照。その発掘現場は、図VIIの国土地理院の地図では、・:記号の位置になる。この現場から西ノ浜の海岸線までは、現在、直線距離で約900m。菜畑遺跡は現在の地形でも、1km以内の臨海地区と言える。

3000年前の海岸線を調べてみたが、直接確認できるものが見つからなかったため、地形図を調べてみた。2014年3月に佐賀教育委員会の発行した中原遺跡Ⅷと云う文化財調査報告書があり、その中で、遺跡の位置と環境を確認するために唐津付近の地形を調べ、報告している。図VIII:旧海岸線・砂丘列地形分類図。図VIIIは、オリジナルのモノクロの図に、丸地が色を付けコメントを入れたもの。ここでも縄文海進の海岸

線と現在の海岸線が近い。

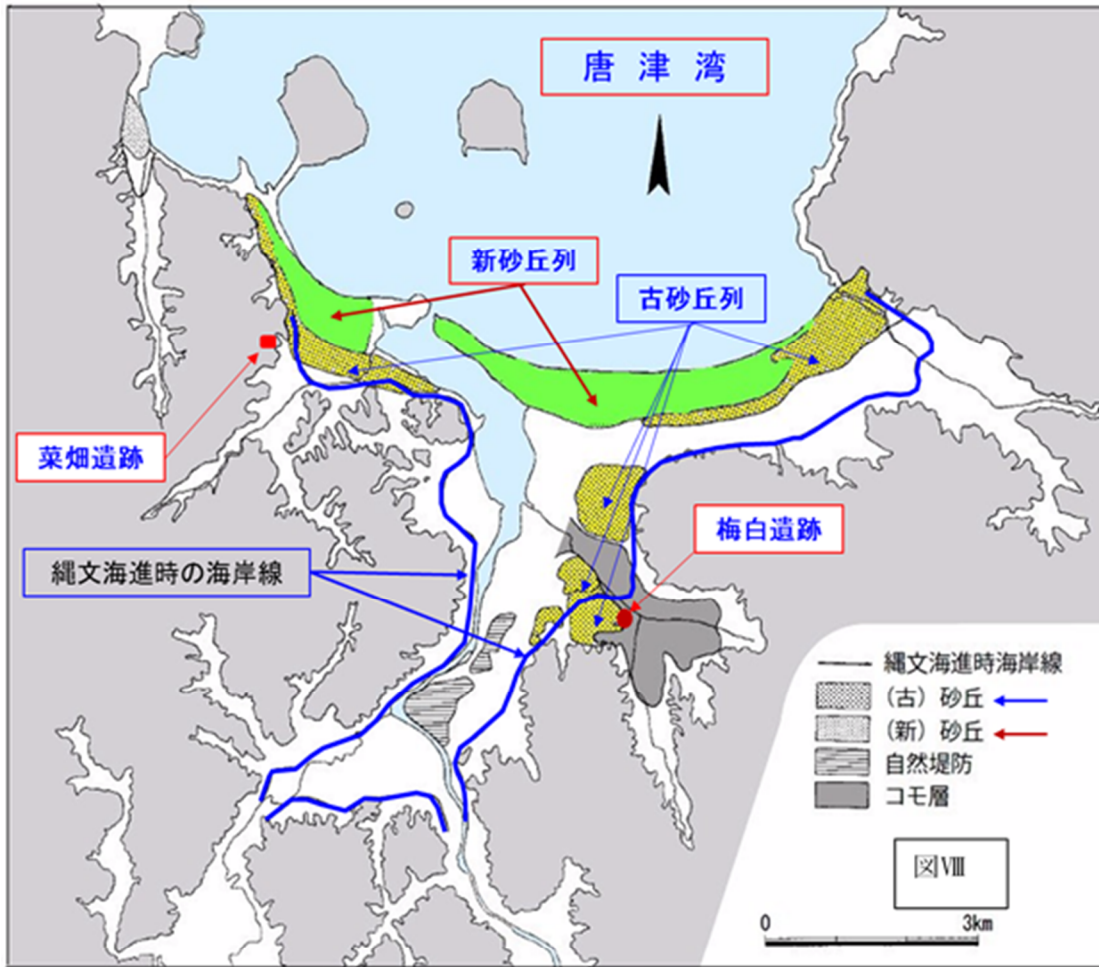


図3 旧海岸線・砂丘列地形分類図 (1/100,000)

古砂丘は、縄文海進後に砂が堆積したもので、縄文時代中に堆積したものの。

新砂丘は、それ以降に砂が堆積したものと考えられており、弥生時代・古墳時代の遺跡は発掘されない。

(なお、有名な唐津の虹の松原は、この新砂丘上にあり、17世紀に植林されたものの。)

従って、

3,000年前の海岸線は、古砂丘列と新砂丘列の境にあったものと推定される。

菜畑遺跡から海岸までは、古砂丘を越えることになるが、地図から読むと距離は400m以内になる。なお、暦博が挙げている試料の一つが出土した梅白遺跡も海に近く、現在の地形でも、海から川に沿って2 km以内で、川に面しており、こちらの方も「海岸に接して立地する遺跡」になる。

結論：

古代の地形図・地質図の示す海岸線からの距離を調べてみると、板付遺跡も菜畑遺跡も、「海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡」で「海岸に接して立地する遺跡」であることが判明した。その外、暦博が挙げた試料の出土遺跡の、福岡の雀居遺跡、那珂君休遺跡も、更に、当初の発表で名前の上があった糸島の曲り田遺跡のいずれを確認しても、古地形図などでは、最初に定義した「海岸に接して立地する遺跡」の条件に合致する。従って、暦博の使った試料は、海洋リザーバー現象の影響を受ける可能性が高く、測定の対象としてはいけない試料と言える。

測定に使用してはならない試料を、『炭素14年代測定法のAMS法によって計測し』、その結果である『弥生時代の始まりは、定説より約500年古い、紀元前10世紀とする新説』は、直ちに、破棄されるべき説である。弥生時代のはじまりは500年遡らない。

以上

引用文献は、文中に記した。

なお、焦点となった下記論文の注2)は重要な意味を持つため、論文のタイトルと注2)の全文を、改めて、ここに示すこととする。

弥生時代の開始年代 —AMS—炭素14年代測定による高精度年代体系の構築—

学術創成研究グループ 藤尾 慎一郎・今村 峯雄・西本 豊弘

注

2) なお、海洋性の魚介類を調理したものが試料である場合が考えられ、データの解釈には注意が必要である。魚介類は海水中のプランクトンを捕食することによって炭素を取り入れる。一般に海水中の炭素14濃度は大気中と比べると低いことが知られているが（食物連鎖の底辺にあるプランクトンはこの海水中の生物なのである）、大気と接している厚さが70mほどの海洋表層水は大気と炭素（二酸化炭素）のやりとりをしており、炭素14濃度の差はそれほどではない。しかし表層水と中層水・深層水は容易に混ざらないので、大気と接していない中層水と深層水は古い炭素を有し炭素14濃度がさらに低い。また深層水は2000年以上の長時間をかけて大洋底を移動し、高緯度地帯において上昇して表層水と混ざることが知られているため、高緯度地帯の表層水中の炭素14濃度は低く、オホーツク海では1000年も古く出るというデータがある。日本海においてはこのようなデータがないため未知数だが、海産食料に多く依存していると思われる人びとが営んだ遺跡から出土した土器の付着炭化物は、海産食料を調理する際にできた煮焦げや吹きこぼれである可能性があるため、試料としては避けたほうがよいという意見もある。ちなみに歴博では海岸に接して立地する遺跡から出土した試料は原則として測定の対象としてこなかった。2003年7月までに研究グループが提示した調査内容のなかにはこの点に関して言及していなかったために西田茂氏の批判をうけることとなった〔西田2003〕。しかし後述するように歴博が2003年5月に示した11点のデータには三つの理由から海洋リザーバー効果の影響はみられないことを反論した〔藤尾・今村2004〕。これについては後述する。